

盛岡高等農林学校と宮澤賢治

武田純一

平成二十二年四月から二十六年三月末までの四年間、農学部附属農業教育資料館（旧盛岡高等農林学校本館、以下資料館または旧本館と称す）の館長を務めさせて頂いた。在任中に耐震改修という大きな工事があったことから、館内の資料の整理をしたこともあり、また、この建物や資料館所有の賢治と関わりのある資料について、学外の皆さんからいろいろとご指導頂いたので、そのお礼も兼ねていくつかエピソードをご紹介します。

資料館の耐震改修

資料館は盛岡高等農林学校の本館として大正元年十二月に竣工し、大正二年一月より使用が開始された建物で、明治後期の欧風建築を代表する貴重な建築物として、平成六年七月に国の重要文化財に指定された。賢治が盛岡高等農林学校に入学したのは大正四年四月であるから、この本館は新築されてからわずか二年ほどであり、真新しい中で入学生生の総代を務めたのであった。当時、資料館の北側には運動場と水田等の圃場が広がっていたので、二階の講堂からは秀麗な岩手山を眺めることが出来たはずである。

さて、資料館は、平成二十三年三月十一日の東日本大震災にも耐えたが、全学的に建物の耐震改修が進む中、この前年から耐震改修の準備に入っていた。現状の調査とモデル実験により建物の耐



図2 耐震改修前の資料館(平成24年4月25日)



図1 竣工当時の旧本館(創立10周年記念帖、大正2年9月)

震性能の評価を行った結果、資料館の耐震性能向上のため、後世の改造によって撤去された耐震壁の一部を復元することにより、耐震性能の向上と文化財的価値の向上を図ることを目的とした補強方針を策定した。耐震改修工事は、平成二十三年七月十五日付けで文化庁の現状変更許可の後、平成二十四年四月二十三日～同十月三十一日までの工期とし、予定期間内に工事を完了した。主な改修箇所は以下の通りである。

(一) 一階の外周壁の復元

図1と図2を見ると分かるように、竣工当時の外壁は、一階と二階の窓部分と同じ位置にあったが、後世になって一階部分の十一箇所(図3と図4)を窓に変更した。今回の改修で後世に改修したこれらの一階の窓部分を、竣工当時の通りに復元すると共に、北西側背面の出入り口部分を窓・腰壁に復元し、耐震補強を行った。図5と図6には復元した壁の軸組を示す。

(二) 一階展示室の間仕切りの復元

図7に示すように、旧第三資料展示室の西側壁より九・メートルの位置に、出入り口一箇所を備えた梁間方向の間仕切り壁を復元することにより、耐震補強を行うこととした。なお、二階は現状通りとした。



図3 1階部の窓の変更箇所（正面側）

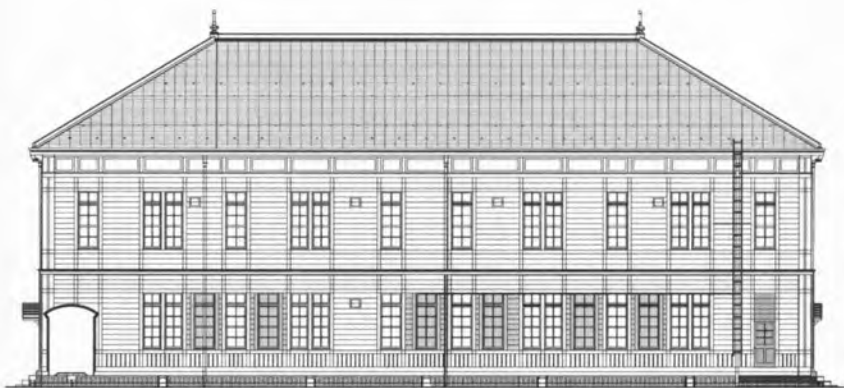
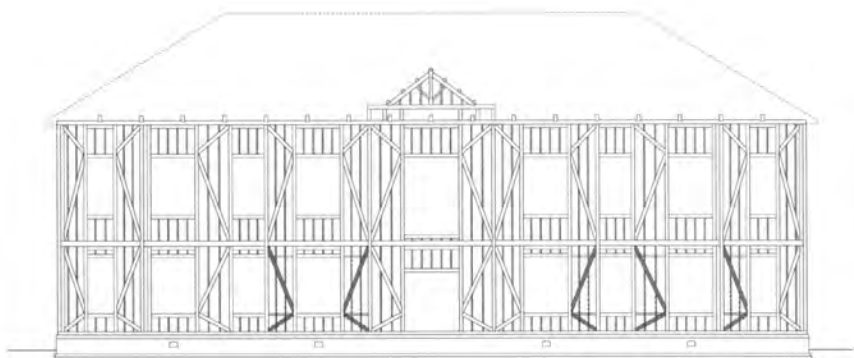


図4 1階部の窓の変更箇所（背面側）

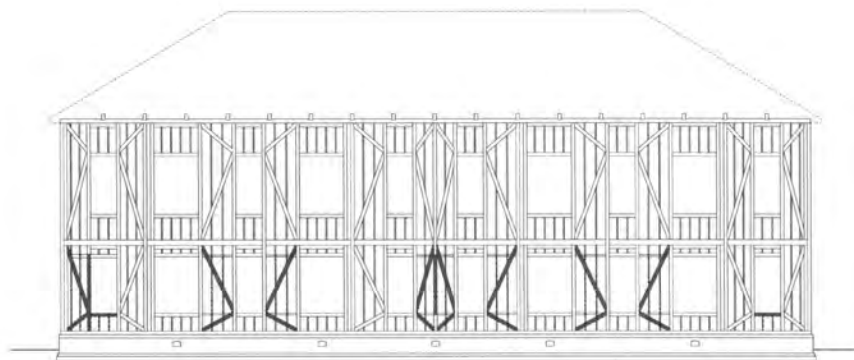
資料提供／(株) 三四五建築研究所



正面側軸組図

凡例 ※外部側より見る
 ■ 後世の改造によって
 撤去された軸組部分

図5 正面側軸組

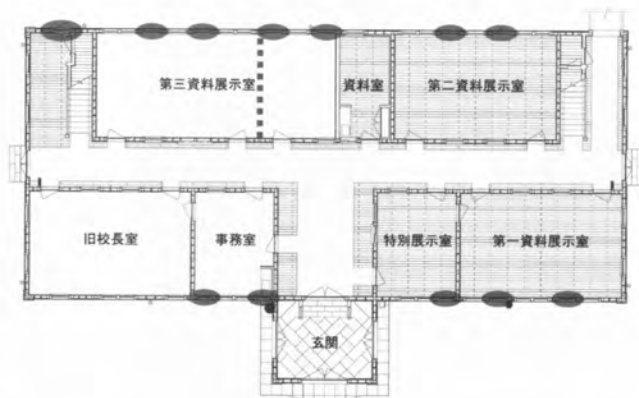


背面側軸組図

凡例 ※外部側より見る
 ■ 後世の改造によって
 撤去された軸組部分

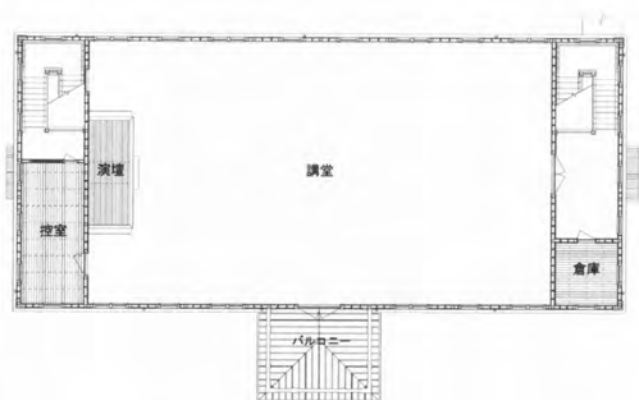
図6 背面側軸組

資料提供 / (株) 三四五建築研究所



1階平面図（修理前）

図7 1階展示室の間仕切りの復元（点線の箇所）



2階平面図（修理前）

図8 2階講堂（変更無し）

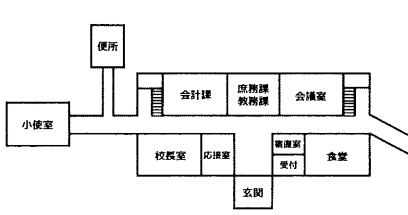
資料提供／(株)三四五建築研究所

(三) 屋根の全面改修と外壁の塗装他

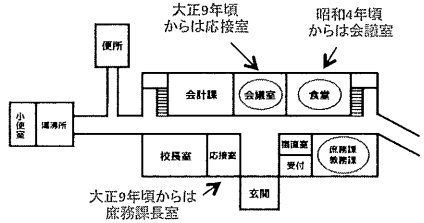
屋根葺材に劣化・破損が見られ、雨漏りを引き起こす恐れがある上、屋根葺材の落下も見られ、防災上も対応が必要な状態であることから、屋根の全面改修を行った。現状のスレート葺き（人工製品）は、全面葺き替えとし、下葺きルーフィングも更新した。また、外部の塗装は劣化が進み、塗り替え時期に来ていたので、外壁の復元に伴いポリウレタン樹脂塗料を用いて外部塗装の塗り替え等の外壁の修理を行った。なお、二階の講堂部分については、図8に示すように今回の改修では手を加えておらず、ほぼ竣工当時のままとなっている。今後は、東日本大震災の際に亀裂の入った内壁の補修や、天井の補修が予定されている。

今回の耐震改修に際し、資料館に関する各種の調査が行われた。外装の塗り替えの変遷については、既に本シリーズの第一輯にて若尾紀夫元館長が述べているので、ここでは各部屋の利用状況の変遷についてご紹介する。

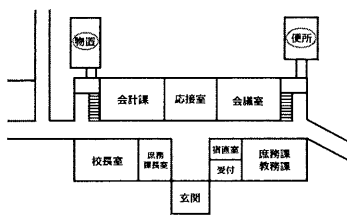
各部屋の利用状況の変遷については、図9に示す通りである。大正二年一月の使用当初から、一階は事務室、二階は講堂として利用されたが、大正中期頃までは部屋の利用変更が行われた。特に玄関入って突き当たりの部屋は二度、用途の変更を行っており、当初は庶務・教務課であったが、会議室、応接室と変遷している。大正九年に応接室となつてからは、昭和中期まではそのまま使われた。昭和初期は、間仕切り壁の改造などの大きな改造は見られなかったが、周囲の附属施設の整備が進み、昭和四年以降は旧本館から食堂がなくなり、再び会議室が設けられた。また、昭和十二年頃には背面の東西に便所と物置が設置され、これに伴い東西端の窓が撤去された。窓の追加が多く行われたのはこの時期で、昭和十、十一年には複数回にわたつて、少なくとも六箇所、昭和中期までに更に一箇所（背面中央）の窓が追加された。また、同時に内外装の塗り替えも行われた。昭和十六年には戦時中の金属供出により、玄関上部のバルコニー手すりの装飾が失われ現在でも復活



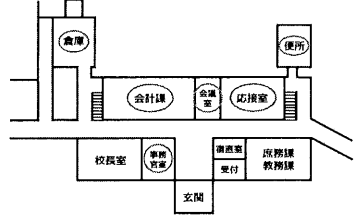
大正2年～大正4年頃



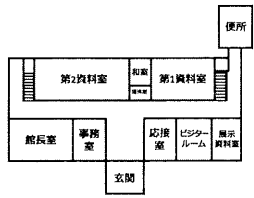
大正7, 8年頃



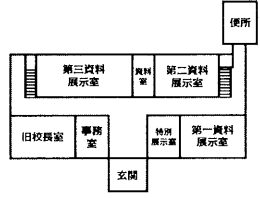
昭和12年頃



昭和20年頃



平成6年改修以前



平成6年の改修

図9 各部屋の利用状況の変遷 (耐震改修前まで)

していない。

昭和二十四年に岩手大学農学部となると、旧本館は大学事務局として用いられた。現在の建物に残る間仕切り壁の改造の多くはこの前後で行われている。昭和二十年頃の配置図では、会計課が広げられ、応接室は東側の部屋へと移動し、建物背面の便所と倉庫にも形状の変化が見られる。また、外部についてはスレート葺きの主屋の屋根の軒先をトタンに変更した。昭和四十九年に大学本部が現在地に移転したことにより、保存するべきかの是非があったが、貴重な建物であることから、同窓会からの寄付を元にして、旧本館は昭和五十一年に修理が着工された。この修理では、庶務課・教務課の部屋に間仕切りを設け、ビジュアルームと展示資料室にし、受付と宿直室の間仕切りを撤去し応接とした。現在この部屋の天井には、間仕切りをした壁の後を見ることが出来る。北側の部屋は、第一、第二資料室とし、会議用の机・椅子の設備の他、授業が出来るように視聴覚機器を入れていた時代もあった。また、玄関ホールの正面の部屋は、会議室から和室と湯沸室に変更された。この昭和五十一年までの間に正面東側の二箇所窓が追加されている。更に天然スレート葺きの屋根を全面人工スレートに替え、破損の激しかった棟飾りは、正面飾りの屋根両端の棟飾り二箇所を取り外して保存し、正面飾り屋根中央と大棟両端の計三箇所を残した。他、玄関上部のバルコニー手摺りの作り替えと便所の水洗化を行った。また、内外塗装の塗り替えも行ったと考えられる。昭和五十三年一月からは、高等農林学校以来の農学部内の資料を展示し後世に伝えるために、農業教育資料館としての利用が始まった。

耐震改修工事と平行して、一階部分でこれまでに展示してきた資料の展示方法を見直し、できるだけ各展示室の展示コンセプトを統一することにした。その結果、図10のように部屋名称を変更し、展示物の再構成を行った。特に第四資料展示室には、賢治に関する資料や賢治に大きな影響を与えた先生等に関する資料を中心に展示することとし、賢治の生い立ちと高等農林での賢治の足跡を辿

れるようにした。展示ケース内には岩石や土壌の分析に用いられた各種の器具、偏光顕微鏡等を初め、分析用の器具、賢治の集めた岩石標本や薄片標本、また、賢治が見たであろう鉱物・岩石標本、盛岡付近地質図を作成したときに賢治の歩いた滝沢方面の調査に関する資料、得業論文（卒業論文）、文芸関係の資料、賢治に影響を与えた関豊太郎教授及び小野寺伊勢之助教授の資料、賢治の童話に影響を与えた火山模型などが展示されている。図11には耐震改修後の資料館の外観を示した。また、図12は資料館の基礎煉瓦の換気口で、普段見落としがちであるが、鉄がモチーフとなっており実学を基礎として重視する創建当時の校風を今に伝えている。校長室と二階講堂については、今回展示の変更はしていない。校長室には歴代の校長先生の書をはじめ書籍等が展示されている。二階の講堂には、歴代校長の肖像画をはじめ高等農林、拓殖訓練所等の校旗、昭和四十八年卒業までの卒業写真（一部欠落）等が展示されている。



図10 耐震改修後の資料館1階の部屋名称



図11 耐震改修後の資料館外観



図12 資料館の基礎煉瓦換気口グリル

鉱物・岩石標本と岩石薄片標本

資料館には明治、大正期に購入された多くの鉱物・岩石標本が所蔵されている。これらの標本の中には、賢治に大きな影響を与えた関豊太郎先生がドイツ留学中（明治四十三年十二月～大正二年五月）に購入したクラントツ社の鉱物標本七十五種（明治四十四年八月購入）も含まれているが、他の標本と共に長年整理が進まず長らく資料館内に放置されていた。平成二十三年に（独）産業技術総合研究所フェローの加藤碩一博士と同地質標本館名誉館長の青木正博博士のお力添えにより、各標本の洗浄と整理をしていただいた。岩石の洗浄は少し手伝わせて頂いたが、長年ほこりをかぶっていた標本が見違えるように当時の輝きを取り戻す様には感動した。賢治の文学作品に使われている七十二の石は、両博士の強いお薦めもあって、賢治の文学作品のワンフレーズを添えて資料館内の第四展示室にて展示している。また、賢治の歩いた盛岡近郊の岩石についても、盛岡サイエンスの栗谷川寛衛氏のお力添えと若尾元資料館長のご尽力で、展示することが出来た。賢治らの作成した盛岡付近地質図と重ね合わせてご覧頂ければ幸いである。

第四展示室には、賢治が採取してきた岩石標本も展示している他、賢治ら当時の学生の作成した岩石の薄片標本についても展示しており、岩根橋／輝石角閃石と記載のあるものが賢治の製作と鑑定されている。これらの岩石薄片標本の他、関先生がドイツ留学中に購入したクラントツ社の岩石薄片標本三百三十六種（大正二年三月購入）他も展示されている。これらの薄片標本については、（独）国立科学博物館地学研究部部長の横山一己博士のご厚意により、資料館所蔵の薄片標本全ての偏光顕微鏡写真を撮影して頂いた。偏光顕微鏡を扱うには細心の注意が必要であり直接の操作はできなかつたが、顕微鏡の傍らのディスプレイに映し出される薄片の偏光顕微鏡による画像には感激した。賢治も高等農林時代これらの薄片標本を観察し、また自分で作成した薄片標本を、当時高価だったZeiss社製の偏光顕微鏡を用いて観察していたことを考えると、感慨ひとしおである。

クランツ社の薄片標本の多くはヨーロッパ各国から採取されたものであったが、中に一枚だけ日本の岩石の薄片標本も含まれていたのが驚きであった。三二二番の Piedmontite-Schist (Piedmontite の現在名は Piemontite), Ofakisan, Shukoku, Japan と記されたこの岩石は、学名が紅簾石片岩である。賢治が盛岡高等農林学校に在籍していた頃には、既にこの薄片標本はあったので、おそらく賢治もこの薄片標本を偏光顕微鏡で観察したと思われる。また、クランツ社の薄片標本は、賢治が自らの手による薄片標本製作の際に大いに参考になったに違いない。紅簾石はマンガン鉱物特有の鉱物と考えられていたが、東京大学地質学教室の二代目教授の小藤文治郎博士が、徳島市近郊の眉山（標高二九〇メートル）の結晶片岩が紅簾石を含むことを、明治二十一年に世界で初めて紹介し、世界中に知られることになったとのことである。ちなみに当時眉山は大滝山と呼ばれていたそうである。また、この時小藤教授は、長瀨・寄居でも紅簾石片岩があることを同時に紹介していた。

賢治は大正五年（二年生）、関先生と神野先生の指導の下で、埼玉県秩父地方の地質旅行に参加しているが、九月三―四日に秩父地方の荒川沿いの岩層を探索し、長瀨などの結晶片岩類や、上流の秩父古生層を見学し、それらの織りなす褶曲美に驚嘆したそうである。後年の長谷川米蔵教授による「長瀨見学の要領」には「鉱物標本陳列所下より …… 六 付近の結晶片岩類 紅簾片岩」の記載もあり、注目すべき岩石の一つとして紹介している。賢治の後輩の藤田謙二氏が大正十三年に秩父長瀨地方の地質旅行を行った際の旅行記によれば、旧親鼻橋のたもとの大きな岩が紅簾片石であり、「その薄紅陽に輝きて麗し」と記している。また、標本として採取したとも記されている。賢治が採取した岩石標本に紅簾石片岩はないが、この親鼻橋では紅簾片岩も採取したのではないかと推測もある。なお、クランツ社の薄片標本の偏光顕微鏡写真は、資料館内に設置したディスプレイ装置で来館者が自由に観察できるようにして行く予定である。

賢治の石の標本でも大変お世話になった栗谷川寛衛さんによれば、「賢治の歩いた場所を当時と同じ季節・時間に歩いて、同じように石集めをしてみなさい。そうしないと、作品に書かれていることや賢治の生涯のことは読み解けないよ。」とのことであった。今回鉱物・岩石標本や岩石薄片標本に携わることになり、心に残った一言であった。賢治の文学作品は賢治独自の偏光フィルターが強く作用しているのです、素人の私には理解できないところも多いのであるが、せめて盛岡高等農林学校時代そのままの資料館にご来館頂き、賢治が学生時代に目にした標本や調査や分析等に用いた実験器具などを直接ご覧になって頂き、賢治がその時何を見て何を感じたのかに思いを巡らせて頂ければ幸いです。

最後に、(独)産業技術総合研究所フェローの加藤碩一博士と同地質標本館名誉館長の青木正博博士、(独)国立科学博物館地学研究部部長の横山一己博士、盛岡サイエンスの栗谷川寛衛氏、三四五建築研究所の上野幸夫氏、濱田文仁氏、元館長の若尾紀夫名誉教授と小野伴忠名誉教授、資料館事務室の伊五澤佳子さん、金野洋子さん、岩手大学施設管理課及び農学部事務室の皆さんには一方ならぬご支援とご協力を頂いた。ここに記して深くお礼と感謝を申し上げる次第である。

参考資料

- 国立大学法人岩手大学・重要文化財岩手大学農学部(旧盛岡高等農林学校)旧本館耐震対策工事報告書(平成二十五年)
- 井上克弘・石っこ賢さんと盛岡高等農林、地方公論社(平成四年)
- 徳島県立博物館：<http://www.museum.tokushima-c.ed.jp/bb/chigaku/minerals/43.html>
- 地学団体研究会埼玉支部：<http://sound.jp/compass/kiroku/98122000.html>

(たけだ・じゅんいち、前岩手大学農学部附属農業教育資料館々々)